

# 連文節変換はなぜあまり使われないのか

## - 日本語入力オペレーションの経年比較 -

長澤直子\*1

Email: nagasawa@g.osaka-seikei.ac.jp

\*1: 大阪成蹊短期大学経営会計学科／立命館大学大学院社会学研究科

◎Key Words 文字入力, キーボード操作, 連文節変換

### 1. はじめに

Windows95 の登場から、20 年が経過しようとしている。この間、技術者による開発によって日本語入力システムの仕組みは徐々に進化し、変換効率も随分改良された。一方で、利用者の使い方を見ると、必ずしもその進化した技術をうまく使い切っていないのではないかという疑問を、筆者は持っている。具体的には、ひらがなを入力して変換操作をした後に、必ずしも必要ではない [Enter] キーを押したり、そもそも文字列を細かく区切って入力したりと、Windows95 の登場以前に使われていた時代のオペレーションをそのまま 20 年後に持ち込んでいる人が、少なからず存在するのではないかと感じるのである。

もちろん、20 年前からずっと同じスタイルで使い続けている人ならばある程度仕方のないことなのかもしれないが、18 歳～19 歳の大学生にもその傾向がみられる。本稿においては、パソコンを利用するにあたり、キーボードで複数文節を一度に入力して変換する、いわゆる「連文節変換」があまりうまく使われていないのではないかという疑問を、学生への調査を通して明らかにしたい。

### 2. 先行研究に見る、20 年前の日本語入力

まず、先行研究として、中野による 1992 年 12 月～1993 年 2 月に実施された調査を概観する<sup>(1)</sup>。

この調査においては、ワープロを日常的に使用していない大学 2 年生 24 名が太郎 Ver.3 (ATOK6) を使用して文字入力作業に取り組んだ。課題文は、朝日新聞 1992 年 12 月 11 日の「天声人語」である。一度にどのような単位で文字列を入力したかという結果は、次のようになっている。

- 一文を入力する .....4%
- 連文節で区切り、文節、単語、単漢字、かなの入力を補助的に使用する ..... 21%
- 文節、単語、単漢字、かなで区切る ..... 75%

また、中野は次のようにも述べている。

「文節の区切り直しが出来ず、変換に失敗すれば、これをさける方法がとられ入力法が変化していく。たとえば、入力が漢字、かなに分割されていく。」

これは、文節の区切り変更(中野の表現によれば「変換区間」の変更)が何度も出現すると、その操作が面倒になり、結果的に最初から短い区切りで入力するようになってしまうということを表している。

こういった理由から、この当時のユーザーが「連文節変換は面倒なものだ」という印象を持ったとしたら、細かく区切って入力の方がかえって手間がかからないと判断されても、仕方がなかったのかもしれない。

### 3. 仮説と質問紙調査

#### 3.1 仮説

先行研究を踏まえた上で、この疑問について考えるにあたって立てた仮説は、次の内容である。

**仮説1.** [→] キーや [←] キーを用いて変換対象の文節を移動できることを知らない者は、[Shift] + [→] [←] キーを用いた文節の区切り修正の方法も知らない可能性が高いのではないかと。

**仮説2.** ひらがなを入力して変換操作をした後に [Enter] キーを押すか押さないかは、文節移動や文節の区切り変更の操作に対する知識の有無によって異なるのではないかと。

このようなことを中心に、20 年前と現在との間で操作方法に大差がないのではないかと考えた。これらの仮説を検証するために、短期大学の学生を被験者とした質問紙調査を行った。

#### 3.2 質問紙調査

調査は、筆者が教員として勤務している短期大学の学生(文系・1 回生)に対して実施した<sup>(2)</sup>。

まず、授業の中で日本語入力に関する様々な方法について、連文節変換も含めて丁寧に説明し、実際に操作も行ってオペレーションを確認した。その上で、次の内容を含むいくつかの質問をした。

**質問1.** この授業を受ける以前に、[→] [←] キーを用いた文節移動の方法を知っていましたか

**質問2.** [Shift] + [→] [←] キーを用いた文節の区切り修正方法を知っていましたか

**質問3.** 漢字変換をした後、毎回 [Enter] キーを押していましたか

文節移動の方法が分からなければ、仮に複数文節からなる文章を一度に入力して、後ろの方の文字列に誤変換があった場合に、それを再変換するための操作ができないことから、連文節変換という方法を選択できないはずである。ゆえに、これらの質問に対して回答してもらうことで、連文節変換が使われている割合も推測できるのではないかと考えた。

調査の内容について、経年で変化がみられるかどうか

かを確かめるため、2009年より毎年同一内容で調査を行ってきた。2014年現在における結果は、次のようになっている。

まず、質問1について回答を集計したところ、図1のような結果となった。

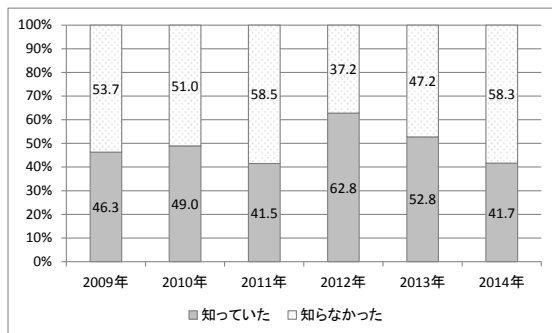


図1 文節移動の方法に関する認知度

年度によって多少の差は見られるものの、概ね、変換対象の文節を移動できることを知っている者は約半数程度である。年を追うごとに「知っている」という者の割合が増えていくかという、決してそういうわけではない。

次に、質問2について回答を集計したところ、図2のような結果となった。

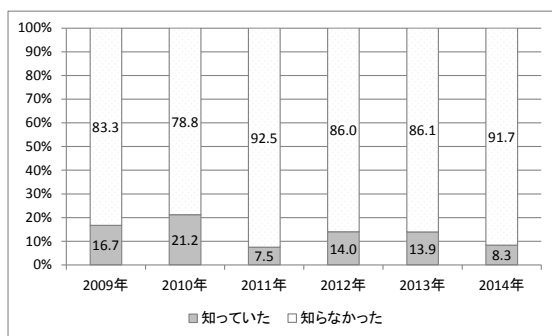


図2 区切り変更の方法に関する認知度

こちらは、認知度がきわめて低いことが明らかになった。年によっては、90%以上の者が操作方法を知らないという結果も出ている。さらに、区切り変更の方法を知っていると答えた者のうち、文節移動の方法を知っていたかどうかについて細かく見てみたところ、ほとんどが知らないということであった。逆にいうと、文節移動の方法を知らなければ、区切り変更にまで知識が及ばないということが言えそうである。

これらにより、仮説1はほぼ支持されたことになる。なお、区切り変更の全般的な認知度も、年度を追うごとに「知っている」という者の割合が増えてきているわけではない。

最後に、質問3については、図3のような結果となった。

おおむね80%程度の者が、漢字変換の操作後に毎回キーを押していることが分かる。ただし、このことに関して、文節移動や文節の区切り変更に関する知識の有無との間に関連性は見当たらず、仮説2は支持されなかった。文節の区切りの修正ができないという不自由な環境の下で文字入力するには、一度に多くの文

字を入力することに対する躊躇があり、常に確定された状況を保ちたいということから[Enter]キーの操作回数が増えるのではないかと考えたが、そうではなかった。

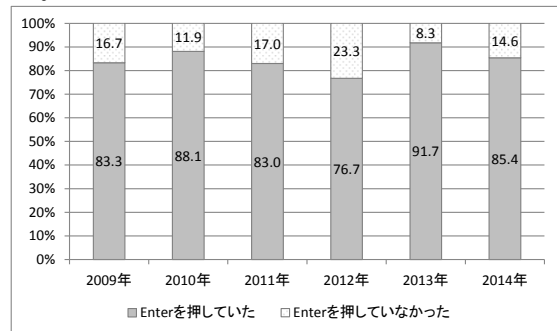


図3 漢字変換後の[Enter]キー操作

#### 4. 考察とまとめ

今回の調査では、連文節入力時における誤変換に対する処理に必要な操作として、文節移動および文節の区切り変更の方法について質問した。前者については、概ね半数程度の者がその知識を備えていた。ただ、後者については概ね20%未満の者しかその知識を備えていなかった。漢字変換後に[Enter]キーを押す者も80%程度存在し、それぞれ、経年で大した変化が見られない。つまり、概観したところ、20年前と操作方法に大差はないと言えそうである。

なぜ、このような状況が続いているのであろうか。

理由のひとつとして考えられるのは、学校での一斉教育による指導が困難なことである。その場にいる児童や生徒が持ち合わせている文字入力技能や経験がバラバラである場合、細かく指導することが難しくなるため、文節の考え方を指導しておいて、文節ごとに区切って入力させ、次の入力へ移る前には[Enter]キーを入力して確定するように指導しておけば、授業運営上のトラブルは最小限に抑えることが可能になる。

もうひとつ考えられる理由として、利用者がタッチタイピングに長けていないことが挙げられる。長い文字列を確実に間違いなく入力することに不安があると、どうしても少しずつ確認しながら入力することになるため、一度に入力する文字数が少なくなることが考えられる。

仮に、小学生時代にそういった入力スタイルを身につけてしまうと、後でタッチタイピングを練習しても、当初身に付けた癖が抜けないことから、連文節変換による効率の良い文字入力へと発展させることが難しくなってしまう。せっかく開発されている技術を余すことなく利用し、効率良いIT利用の方法を習得するためにも、初等中等教育における指導面も含めて、問題解決を試みる必要があるのではないだろうか。

#### 註と参考文献

- (1) 中野靖夫：“コンピュータの操作過程の解明(4)一文書作成時の初心者の操作行動—”，上越教育大学研究紀要，第13巻，第2号，pp.161-176（1994）。
- (2) 学生の使用マシンはOSがWindows7であるため、Windows7に付属するMicrosoft IMEでの文字入力方法に基づいたものとなっている。